

うたそら

第
15
号

2023
July

7

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
テーマ詠欄 「短」	16
一首評 「そらよみ」	20
気軽にクロスワード	22
短歌でまちがいさがし	23
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	24
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	26
次回予告・編集後記	27



麻数	@umberhemp
麻倉ゆえ	@AsakuraYue
雨虎俊寛	@amefurashi3107
アライアヤ	@araiaya31
新井きわ	@kiwa0419
有村桔梗	@chattenoire_k
井倉りつ	@uta_litz
池田竜男	@tankadragonman
十六夜／朔	@izayoi_2022
石川順一	@Hitler57
宇祖田都子	@Shinnsyutu2020
泳二	@Ejshimada

遠藤ミサキ	@hsweil
大坪命樹	@qe_noi
大橋春人	@OotsuboMeiju
おおむうけんた	@hachidz2
歌島孟	@subperf
がね	@Sinn1990
廻れ井戸	@amicus08
河岸景都	@kaionjiioe
水谷雪	@kate_kawagishi
君村類	@kitaya_misoniso
銀嶺	@kmmr_r09
くろだたけし	@kankochan555
サラダベートル	@tkuro2016
汐射ハルカ	@kyokousalad
鹿ヶ谷街庵	@shioiri_haruka
西鎮	@kasamabakuchi
雀来豆	@xi_zhen_ivUT
白石夜花	@jacksbeans2
白藤あめ	@yohana_no_sekai
寿司村マイク	@ametxt

豆打だんす	@zunda_dansu
たえなかなすず	@suzusuzuz2009
多香子	@kohagi_tw
千原こはぎ	@moyoko_bungaku
シマモヨコ	@shakufur
堂那灼風	@croissant_hey_z
ともえ夕夏	@longmemo_tanka
永井駿	@nakam8
中村成志	@nalda_aa
奈瑠太	@jacky244Ray
西淳子	@smrakira
西村曜	@aie0himeco
薄荷。	@8yuki_3kura
はゆき咲くう	@haruki_nb
工oruki	@moonusagitenshi
久久力ナ	@hirochin_dos
廣珍堂	@Ymc6rhzyfEZgwg
笹地静恵	@momoka_fukuyama
福山桃歌	@mao_or_mana
真岡まな	@mskpompomfuwa23

御糸ちち	@MEATsachi
深影コトハ	@cotoha_mikage
南字実	@m_yia_o
水也	@myao_rrr
宮岡りょう	@57577_77575
深山睦美	@mushtake
虫武一俊	@musouatsushi
虫追篤	@mucc12022
村田一広	@Nj40Fcvg9gicRpu
森内詩紋	@4kitanka55
杜野詩季	@moronooto
茂呂直人	@rou_tanka
臙	@32wata_gihe
渡邊光子	@hm143ponta
和田晴美	

計69名

たくさんのご参加
ありがとうございます！

連作欄 8首の連作 自由詠 #うたそう

ラムネのなかへ

雨虎俊寛

スターティンググリップ握り僕たちは合わせてバックスタートに入る
『take your marks』（電子音）着水し見上げる水面ちりちりはぜる
澄んだ水 細かな気泡 ぐんぐんと黄色のタッチ板が遠のく
そら色のスイムキャップを横目にしクイックターンのちラムネのなかへ
水を掴み水を離す 5mフラッグ通過あと二掻きか
なんとなく水掻きのある手のひらで押した第4コースの黄色
ただ空を見上げていられる背泳ぎが好きだったんだ 照明白く
アメリカンドッグ頬張る夕立のきみの髪からプールの匂い

Foods

新井きわ

鳥の声をCDで聴くよな街に棲み冷蔵庫に卵だけはある
思い切り林檎を齧ってありありと歯型で識別されるわたしだ
綿飴は舐めなくても縮んでく 私の遺伝子は誰も継がない
何処までも生きてることに放縱で猫はカナカナの声まで食べる
冷蔵庫一丁目にある茹で卵のしずかな死が祝われている
人ひとり殺めてしまう勢いでハーゲンダッツにフォークを立てる
我が一生に伏線のあるらしつくつくとたまに芽を出す若荷くれな
星明かりさみしい夢を見過ぎだかポケットの中でフリスクの鳴る

はんとし

井倉りつ

離れてるあなたと月をはんぶんこ 満たされたくない部分があつて
足りないものだらけのふたりは確かめない 確かめないまま星を数えて
花火、夜景、星野リゾート この人は会えない夜のことがかり言う
きつとこない「いつか」の話 雪の夜の窓のむこうのぼやけた灯り
排気ガスに揺れるピンクのキョウチクトウ 命ごと消したくなる朝だ
飛ぶためのとどめの合図が欲しいのに車に轢かれたガラス、待ってよ
治すための薬 吊るためのロープ 登るための靴 片道きつぷ
いつのまに青がこんなに濃くなって、夏じゃんこんなの、ひどい、まぶしい

くたくた

池田竜男

夜は蒸すちよつと待つてと妻がいうこれは山口百恵の待つて
ちやぶ台をいつも返せる口と住むやさしい鮫だそれがせいぜい
通らない声でよかった鴉でさえ指示に尽くせぬことにじませて
張る肩を張る肩が選ぶのかもしれない 揉む力は確か
蝙蝠もこのようにして飛ぶのだろう前にも後ろにも家族がいて
雨ニモマケズ風ニモマケズ聞いている天井裏のしずかな梁が
背を伝う指が何本かは分らない原野をでくのぼうがうろつく
くたくたのときだけ行ける売れ残りの馬二頭引く山にいるんだ

「公園と雨」

石川順一

公園を帰れば蠅に絡まれて剥き出しの鍵を見て居る夕べ
公園の丘を登れば咲いて居る泰山木の白き花かな
穏やかな雷鳴の内にサンダルは軒の下行き靴脱ぎの上
落雷の凄まじき時エヌエイチケー再放送のドラマ見る母
アスファルト乾く速さをちらと見る大雨雷鳴過去歴となり
大窓に雨粒残り抹茶バーアップルパイを食べれば水飲み
雨涼しそれに伴う風涼し夕餉のおかずはニラレバである
庭を舞う大きな揚羽とタテハチョウ・日野草とポーチュラかな

屋上猿部15

宇祖田都子

ボール紙細工の蟻がひっそりと器械体操する複葉機
ジーツという極彩色のレンズ豆中に無数の計器の光る
半ズボン白い靴下骨格がハニカムならば鳥に似ている
銀輪に拘束された六月の夜の正体は万有引力
お月さま点いたり消えたりおこりんぼでこぼこ三角穴から見える
じゅらるみんぶるぺらほいーるらじえーたーべだるじおらまかったーないふ
消えていく存在こそがセスナ機のげらげら笑う翼の中心
贗物の猿が都会をよぎるから吐息も涙も董色かよ

ボニーとクライド

泳二

ぼろぼろと旅するように紫陽花は咲くぼろぼろと旅するなんて
読んでない手紙でできた山がある今度ふたりに登ろうねって
雨粒に踊る葉っぱを見る赤い傘の下 ボニーとクライド
掌の上の掌 動脈は暗渠 明日は燃えるゴミの日
最近の天気予報は当たるから今夜わたしも雨と降りたい
やさしさの形の背中見送って期待通りに裏切られてる
届かない硝子の厚さ六月の小さな声は窓に染みこむ
ほんとうは並べたい言葉もなくて今日も季節がひとつ終わった

悲運の折り紙

大坪命樹

荷を積みみてあとは明日いづるのみ 夕食摂れるに妻に寒気の
薬飲むも体温下がらざる妻とともに不眠にて明くる朝なり
土曜なれど病院さがして診せにいつ コロナならずば上京せんとぞ
わがねがひ虚しくコロナ陽性なり 二人ぞ自宅にてすぐすべき
感染を我も隠すれど陰性なり 莫迦はコロナにも罹らざるか
しかおもひ妻と親しくすごしをるにコロナに罹るまことが莫迦なり
上京し都を楽しむのちならずまへに罹るは非運の折り紙
盛況が文学フリマに出でられざる いかなる馬の塞翁なるべき

世界のすべての鳥たちへ

大橋春人

雨の日のその静けさの鳥たちよ羽根に水玉いくつも載せて
古い歌遊びがこうもやさしくて言葉だけなら川面を撫でる
コンビニの味噌汁ほどのぬくもりを雨に打たれた鳥にあげたい
水色のバスは南へ 私はしまうま色の靴で本屋へ
ルンバから生まれるルンバもあるだろう未来の墓場から見てやろう
願わくば梅雨空に降れあじさいよその日ところはおだやかならん
駅前焼け鳥屋から漏れてくるおっさんたちの笑い声など
明日こそ晴れますように 公園の鳩は翼をひろげてほしい

曽根崎心中するワタシ

歌島孟

何故、こんなことになったのだろうか、思いあぐねて鐘の音が鳴る
天仰ぐあなたの顔の輪郭が涙のあとで光ってみえる
足枷とするには軽い夜の露と世を振り捨てて歩む道行き
目に入る色が輝きます、全て、世界が最後みたかと思えて
「あれは何?」 ついに捕り手が来たんだと見れば稲妻光る水滴
「たましいさ、僕ら二人の」 いつまでも消えぬ炎と焦がれていた
光明の朝は来なくていい、幕を降ろそう僕は、僕の闇路へ。
ふるえてる思いは顔に出さないで、さあ、はやくって、笑って言おう。

引つ越すと決めた

がね

引つ越すと決めた途端にこの町のすべてが愛しい　ような気もする
次の家、次の家すぐに現れる　婚活もこんな感じでしようか？
もうずっと悲しんでいる気がして　部屋には一人分の痕跡
ダンボール箱に収めた生活が出てくるまでも生活がある
光あれ　私を買った電球が部屋に光をもたらしていく
コーヒーを淹れて一息つくわたし　イメージだから綺麗に立ってる
必要なものだけ次へ持っていく　もしくは残せなかったものを
前の街からこの街へきた風が私を街へ押し広げていく

犬街で会う

涸れ井戸

徳島のうっかりさんが来阪し初夏の週末犬街で会う
リアルでは初対面の目八さん三人で俳句のはなしする
犬街は粹な本屋で人生の相談できるスペースもある
ラクさんに転職の悩みを伝えメンクリを勧められしんみり
店長とうっかりさんと目八さん、自分がずらずら歩く庄内
眠眠のきんきん声のおばちゃん商店街の歴史を語る
性別もSNSじゃ曖昧で羊の肉は良く焼けている
阪急の低いホームでお別れをしてすぐにツイッターを起こす

紫の花の香り

河岸景都

小人らが住まう森へと分け入って澄んだ硝子の囁きを聴く
紫の小さな花が集まって見せるダンスはいつも同じで
変わりゆく最高気温　二つ目のソフトクリーム飽きずに食べる
遠ざかる景色の中に探すのはあの日落としたドライフラワー
降る前の雨の匂いが分かるまま大人になったことが嬉しい
見上げれば走る電線　青空は望まないまま区切られてゆく
あの山を超えてゆくバス捕まえて花束だけをそっと乗せたい
帰りたい　バスルームには紫の花の香りが満ち満ちている

森のひとびと

北谷雪

カンヴァスは未開の王国　空想が求愛のように羽を広げる
パーカーから枝葉の繁る森の匂い絵の具まみれの美大生ゆく
美術室は完璧だった　あまり1、みたいな椅子と先生がいて
夕暮れの陸上部員を見下ろして絵筆を握ったままに手を振る
絵の中を“向こう”と呼んだ門番のように額縁専門店の主人は
コンクリートジャングルの葉陰にひっそりと王の広間へ続くギャラリー
学芸員は人差し指をくちびるへ（囀る鳥を撃ち落とすと）
ままならない大人になったら描けそうで画廊の一角予約しておく

calling

君村類

あてた耳へしずかなひかりを寄せてくるスマートフォンのほうが清らか
こんなにも声を梢にさせていくあなたへと降る長い長い雨
どこまでも寄せては返す波として繰り返される大丈夫、大丈夫
できるだけ人肌のまま触れたくて声に加えて首もうなずく
「役に立つ」の「役」の役目の答えらしい速さで水が水へと戻る
飲み干した水の透明さでうまれだからこそヒトは争って死ぬ
細く細く換気のために開けている窓の幅からやってくる救い
calling　あなたの上へ梅雨が持つ晴れ間のような言葉をかざす

応援したい

くろだたけし

寝転んでしまいたいとき寝転んでしまえるように空白がある
待っていた荷物が届きお楽しみ前の細かい説明書の字
繰り返して聴いても歌は変わらずにわたしは古くなっていくけど
くしゃくしゃに丸めて強く投げてみて特技の欄はずっと空白
保護色にだまされやすいわたしには森はいつでも平和に見える
いいほうの角度に顔をかたむけて写る気持ちを応援したい
地球ごと空へと放り上げられてこれから落ちるところじゃないか
街灯があるから黒くない猫が黒くないまま歩いていった

カクコムコンテストに出さなかったもの

サラダビートル

犬が死ぬ映画を覚えてくれるんだこっちは事故物件がわかるよ
“何でもいい”が許されているご家庭で今日も飛び交う“何でもいい”が
マリトツオが流行ったハンドスピナーも流行ったどっちも触ったことない
しょうもないボケをしたから引くそれがたとえ難病の人であっても
タピオカを食べることなく死ぬのかなそこで出てくるのがタピオカ
トイレを借りる感覚でイートインでキムチを食べて帰って客
「サラダスピナーがハンドスピナーくらい流行った世界で起きるようなこと」
日本一大きいジェットより短い飛行機に乗る　短さが良い

さかな

汐射ハルカ

新緑のみどりを揺らす一迅の風には白いジャックパーセル
初夏を過ぎてかぎろう戯れに冬の果実の香水ひとつ
遠くまで鏡のような水面はめずらしいんだ砂を蹴ってる
うす曇る空をさかなは泳いでく北も南も解らぬまま
曇天のまだ夏前の熱放射よなかに脱いだ靴下が無い
曖昧で期限の切れぬ不確かな約束ばかり交わしていくね
みしみしと傷んだ駄もて余し投げ出すきみもぼくも堕ちゆく
肉体を包みかねないぼくだけど対峙している羞じと境目

勝手に食べる

鹿ヶ谷街庵

一番は太宰治で一致して二番を当て合う雨の図書室
鉛筆で描く自画像の真っ黒に塗りつぶされた目にあるひかり
今日もまた告白できずに自転車で『リンダリンダ』を死ぬほど叫ぶ
透明な独楽が激しく心臓でまわり続ける片恋の日々
君に似たひとを見かけて追いかける君じゃなかったけど追いかける
何度でも叱られたくて何度でも君のプリンを勝手に食べる
手をつなぐ僕らを月が照らすから夜の散歩は祝祭になる
ガーベラが弾いた水の一滴に君が映って消えてく、またね

青林檎

西鎮

突然に会おうと言ってきた友と似た顔をして五月がそよく
相方を失ってから靴下は鳥の骸のようにつめたい
お前ほど器用じゃなくて、と言いい兄は奥歯で薄荷飴を砕いた
座礁したザトウクジラを深海へ誘うようにひかる漁り火
さあ、跳べとささやくような眼で鳩は向かいのホームから翔びたつた
六月のきみにならった幾重にもライム色差すアナベルの名も
ひとよりも何かを掴めていない手にナイフを握り剥く青林檎
お互いに風だったんだ太陽を探してきみは部屋を出てゆく

五月、その他の短歌

雀來豆

春の森で木の実を拾う冬眠のあいだに熊が見ていた夢を
側溝の蓋から覗く露草の青が光って五月を告げる
しろたえの泰山木のあるさに満ちて夜禽は声たてており
きみは易々とテキストに転換する何も食べずに生きていられる馬の話を
五月、生い茂る木に請うわたしにもすべての葉っぱに宿る力を
真夏日は夏だけじゃない音もなく発火するソノシートの朱色
エコロジストの音声ガイドが語りだす人が樹木に変わる話を
永遠に食べ放題のイチゴ狩り(Strawberry Fields Forever)おそろくNOでおそろくYES

たいうな鬱たち

白藤あめ

おくすりはそんなたくさんのんじやだめ ラムネあげるよ一緒にいるよ
ハンバーガーショップで夜を明かそうよ 普段食べないやつを頼んで
しあわせはわたしたちには似合わない 街灯が消えるのを見ていた
屋だつて寂しい気持ちは消えないね このまま世界終わらないかな
人生の最後に食べるメニューにさ 手料理なんかあるはずないじゃん
お酒とか薬で救われるほどのフェーズはどうに過ぎてしまった
十四のときにきいたボカロ曲とかにいまだに救われちゃってる
人間は星の数ほどいるけれど星は灯りであり見ええない

花に亡霊

寿司村マイク

桃色のロールスロイス・ファントムはセブンイレブンには似あはない
徐ろにスモークシールド下降して花のこぼれてゆくアスファルト
あでりあぬさまと呼ばれてスカートの少女の広い後部シートよ
鰐二頭殺してできたうつくしい財布をちいやが持たされてある
速すぎるゆびのタッチでパネルから云ふ「お支払ひ方法をお選び！
金ボタン上まで掛けた運転手からふたすぢのその肩章
絶え間なき安心感と安全を衛るぢいやのロマンズグレイ
いつか思ひ出すのだらうかなナチキの脂と二人の大きな背中を

超個人的メルヘン

たえなかず

観客のいない花道 きみだけがすみれの束を渡してくれる
しばらくは歩いて笑って歌ったらそれぞれさみしい家へ帰ろう
真っ白な水着のあとを中点に夏のしずくを払うしぐさで
だて眼鏡ソーダ色して生き急ぐひととなしにそれきり
駆け抜ける、たたずむ一度振り返る それでもわたし以外の人は
キャンドルを吹き消しましょう このままじゃ二人の未来が見えすぎるから
平成の断片は光り続けている かよわく強き広末涼子の背で
振り向けばいつもそこには居ない月 すり抜ける猫みたいで好きよ

七夕に

多香子

七夕も近づき銀河に白鳥座一等星のデネブ喜ぶ
一日に紫のドレス着替える色とりどりの紫陽花の花
あの角の豆腐屋春に店閉めてスーパーで買った奴で飲む夜
老兵は消えゆくわけには行かなくてプロテインとか頼ってしまう
夏の陽は容赦なければ我慢せず女もすなる日傘さす君
山川に沢蟹あれど食べられぬ捕えられないあなたのようで
言い返したいけど出来ぬ夕ぐれに猫がかわりに怒ってくれる
曖昧という字は甘い味に似て逃げ言葉なのに私をくすぐる

青い花

千原こはぎ

雨のない梅雨のかわりか泣かないでいられる日がないこの六月は
たくさんの人にあなたが愛されていたことを知る白い会議室
感情の回路が壊れているらしく今日は「はばたき」の四文字で泣く
ワイパーの合間に滲むあじさいの青 季節はかつてに通過する
ひたすらに書類を書いてあのひとの喪失を世界に馴染ませる
許可もなくまぶたの裏に住み着いた暗雲を見ている午前四時
眠るのが前よりもっと下手になりまた人らしさから遠ざかる
いつかこれも日常にする 線香の匂いの部屋に置く青い花

日輪

ツマモヨコ

辞書の背を右手で受けて身体にもまばたきという外函がある
暴力はあかるい きみが日輪と言えばきこえてしまう風鈴
他人の金で購う他人の誕生日ケーキこうしてまで生きるのだ
さつき挨拶した先生とすれ違うときの会釈のように降る雨
お持ち歩きの時間を訊かれ腐るのはケーキであってわたしではない
かなしみを唇で探し当てながら机間巡視の顔をしたんだ
居心地の悪い愛には勝てないと蛇腹ファイルをぐわつと開く
たまにきみの机になった 空論がわたしを少しだけ猫背にした

古代魚

堂那灼風

気味悪い骨が見つかる現地語で「封印」という名を持つ露頭
海底から押し上げられて古代魚は摩耗しつくすまで風を切る
弱かったわけでないのはよくわかるように子孫も途絶えたあざと
展示室を進んでゆくとレプリカに混じってたまに置かれる死骸
丁寧に復元しても本当は地中の姿しか知りえない
四億年前の化石は白亜紀の足下にもう固まっていた
ワンシーン夢に出てくる甲冑魚ごめん人喰いザメに重ねて
四億年離れた地層に一匹が取り残される文明のあと

クラミツハ（五）「還る」

ともえ夕夏

晴れ渡る空とはなしをするようにたまに体を起こして祖母は
庭先にすずめとともに遊び来る萩を手折りて届けるおさな
村のために祈り続けた祖母 しろき幣も装束もずしりと重く
晴天が四日続いた朝祖母は静かに龍の許へ帰りぬ
村中が賤家に集う誰そ彼やみんなきちんとした服を着て
おさな兄は今日も片手に萩を持ち亡きクラミツハに手向けておりぬ
この山のすべてが先祖だと言った祖母の遺灰は谷川へ還す
困ったわ雨が降りそうぽっかりと村の抱える心の穴に

引つ掛けやすい

中村成志

目覚めればたまごを握る形してゆるく丸まる右の手のひら
四つ折りのハンドタオルじゃ間に合わない季節が来るね（来たよ）雷光
鳩尾に拳うごめく心地なる雨期の光の呻きが窓を
能面へ手をかざすとき稲妻の静かに満ちてそののち薄暮
道へ出てまずはコンビ二へと向かう背に病院のどこまで白亜
丸かじり櫛切り湯剥きぐずぐずのトマトの赤を身内へと吸う
さあ君を連れて港へはつ夏の鎖骨は指を引つ掛けやすい
早すぎる夏の陽射しに紫陽花の色が脱がされてゆく浜辺前

夏を愛した

奈瑠太

ラメ糸はチラリチラリと光るから視界の端ではしゃぐみたい
流れ込む涙、乗っ取られたくない 天気雨からニライふるえる
いつのまにか痛みを避けて鈍らせてとおくへカナイ目を伏す
さよならと向き合うことを怖がって均したところに立たない墓標
無のことは 光りの岬となる南わたしたち生きながら見つめる
だからいま悲しみが流れ込むのなら二倍のなみだ流せばいいか
下限の月もいずれまた満ち満ちてゆく枯れた胸にも世界樹のこえ
もういいや君の悲しみに染まろう防波堤などころにはない

食パン袋

西村曜

人生の話を皆がするカフェで鳥のことのおとうとは言う
夏やからグラスの露に湿ってくコースターにも快樂がある
死を望む病を生きて雉鳩よ、400円だよ今日の青空
食パンを手を持ち歩くひとになる食パン袋がない日のぼくは
意味のない字空けと言われ意味のない青天ばかり広がる地元
失敗をしたときちよつと笑うなよ鳥は真顔で飛んでいるから
きみだけに生年月日を伝えたいそれがすべてのパスワードだよ
届きますように届きますように二円切手を板の間に貼る

狂人鳥（きんぐペンギン）

西淳子

ペンギンを七羽集めて合体させて狂人鳥を作りたいんですよー
Tシャツの英字を訳せば「レターパックでペンギン送れ」はすべて詐欺です
ペンギンに帝京平成大学の凄さを教えるファミリーマート
「はじめまして松尾です」にも真つ白なペンギンがいて、ニワトリじゃなく、
ちよつと待ていーちよつと待ていーが鳴きしきるペンギンだらけのVTR
エンジェルの素敵な墮天 ペンギンのモノマネします！とか言いながら
ペンギンにも寿命があると知った日の「きんは百歳、ぎんも百歳」
チャリで来た。北極に来た。ペンギンに会うため三千年かけて来た。

雨傘の街

薄荷。

確実なことが欲しくてコンビニの林檎デニッシュの正しい甘さ
黒鍵を選んで音を鳴らすように水たまりふたつ飛び越えていく
新品のビニール傘を目標にアレグロで降る初夏の雨だれ
青信号で動くビニール傘の海を遅いクロールですり抜けていく
サモワールの湯気しゅうしゅうと歌いだしロシアンカフェの華やかな午後
地下鉄の順番を待つ行列の先頭に立って少し楽しい
置き去りにされた誰かの雨傘を乗せたまんまで走る地下鉄
勝つことも得意じゃなくて人波に紛れてしまえるこの街が好き

二人の時空

はゆき咲くう

決められた二人のときのお茶の間の並ぶ枕の向きやりモコン
かすてらのザラザラ紙を剥がしてく恋した理由そこにあるから
鳥たちがリングかじって誘いきて風の動きに合わせて飛んだ
風になる屋根の隙間の梅雨星にチュンチュンと文字を紡いだ
遠くなる足音と柔らかな水もういくよって見える十五夜
今自分のころ十年後へ届ける華を嗅いで猫舌なりて
あの窓は鍵を掛けずこのままに羽を休める君へ差し出す
お砂糖を火で炊くように引力でギュッと固めて宇宙を旅する

空を見る、海を見る

久久カナ

惑星の上限として見る空は厚み五百キロほどの天井
この星を出れば宇宙でキリがない上を見たって下を見たって
見るだけで触れないことを選びつつ海と空との違いを思う
水族館で過ごしたのちに夕暮れの海を故郷のように見つめる
もし空に魚が棲んでいたならば夜景の上にきらめく鱗
難しいことを考えてもいいが今はこの三日月を見ている
そこにあることならわかる夜の海みたいに見るきみの寂しさ
天気予報を天気は知らずきみよりも自分の涙がわからなかった

三角形の底辺にいろ

福山桃歌

夜深いところでそつと繋がってこのまま愛さなくていいから
はつなつの風が素肌を撫でていく馴れ馴れしさで近づけたなら
振り向かない向日葵だから太陽の方ばかり見て こっち向いてよ
ありふれたハッピーエンドは毒だつて知ってるんならこの手を取って
紫煙 どうしようもないから誤魔化して笑えば困ってくれるんだろう
浅ましくどこぞの神に祈るたび白い素肌はいっそう甘く
狂わなきゃやれない恋は一日中降り続いてる雨の煩さ
愛してよ 三角形の底辺で落ちてくるのを待ってるからさ

γ υ μ ν ó Ϛ

まさけ

なぜ人は衣をまとい生きるのがアリストテレスに訊ねてみたい
俺もその昔全裸を極めたと兄が持ち出す2歳の写真
銭湯で己を布でひた隠す兄に心底失望をする
カント以前カント以後と定義して全裸はどこにあたるのだろう
メロスの無意識全裸あれこそが全裸の最高峰であること
へウレーカ！へウレーカ！と胸中で叫ぶ露天の月が綺麗だ
創世の人も全裸で受けた風 目を閉じ仰ぐ壁扇風機
形而上学的全裸わたくしは我を晒して明日も生きる

梅雨の肌

廣珍堂

出勤の汗は背骨で膨らみぬ袍と傘で拘束されて
恵なる水を湛へてみると聞く重き雲ただ禿頭を撫つ
よく冷えし蜜柑に結露する朝は君のうなじに汗を知るかも
ワイパーがほどよく水を弾いたらふたりで夏の助走にはいる
はらはらと早苗をたたく今日の雨微分積分ばらばらとなる
雷鳴も暗さも来よと空を見る大事な傘の骨は折れつつ
コンクリを打てばまたたく雨となり養生シートを脇に抱ふる
蛞蝓が流しのキャベツに登るころ今夜は回鍋肉と決めたり

個人情報朗詠

笛地静恵

こうとしか生きられなかったみじめさを道のカラスへあやまっている
ふるさとの訛りなつかし旧友と五十年目の同窓会で
どうしたのなんか五月の近すぎて優しいものが肘を推してる
ずぶぬれのラガービールを飲み干せり未来へ走る者みな疲れ
少年を愛し続けた帝王は西の夷狄に墓を暴かれ
ころころと国道ころがれ観覧車この町あの町恋を恋して
地球の海に最初に生まれた単細胞生物の子孫なんだ 僕
シヨッカーのひとりだけだよ俺だつてなりたかったさ仮面ライダー

ちぎり絵

御糸さち

もういないような気がしてふり返る 思い出なのに思い出せない
錆びきったフレーム 鳴らぬベル 私 底抜けの前箆にシヨッパー
歩行者用信号がまたたいていて(星?) ブレーキを握る、強く
日焼け止めまた忘れてる手の甲をざりざり削る不可視光線
後悔は和紙の重さだ遠目には華やか色かもしれなくて
ちぎってもちぎっても海の底みたい**マリンスノー**消えてはくれないね
あざやかに彩るはずのちぎり絵で全てを覆い隠してしまう
もういない人の代わりにふり返る 今はそこにはまだ何も無い

蒼い

深影コトハ

放課後の闇に青光る生き物のなかで私が一番きれいな
答案を裏返したら先生へ読めないくらいに薄く、恋文
ブラウスは透けてはいけない心臓に隠した星座が光りだすから
幻獣を育てに行こうよ二次性徴終わった人から制服脱いで
大人しかできないことをする代わり髪を結わえてまた解かれて
萎れてるふりして息を潜めてる夏の雷雨の真ん中に君
神の子じゃなくなつてから炭酸を飲むようになった 肺を汚して
夢から醒めた夢から醒めた夢だから青い余韻を持て余している

告解とステンドグラス

水也

ゆめよ、ゆめ よいこでいますパパとママたからものまで追いやらないで
鏡にはうつらないものまぶたには銀色のラメ落としてくだけ
クッキーを焼いているのよあまいからあまいんだから知っているでしょ
星屑が降り注いでるよるのまち透明な板越しに見ている
眠りなさいベッドの上だけならば生きていいよわらっているよ
祈る手で数字をつくる何枚の価値があるんだ蝶は羽ばたく
キラキラの色をつけてく跡形もなくなっていたさいこのわたし
夢を見ているのほんとうなんてない言葉もないよ溺れてしまう

遺言

深山睦美

遺言の『歯あ食いしばれ』は無効です だからゆっくり口をひらいて
夢色のでっかい馬糞撒き散らし竹下通りを往くユニコーン
ガシャポンから出てきた蟹は死んでいた…まだ生きている蟹を救おう！
くるみ割り人形みたいな咳をして列に加わる塹壕の中
踏切のバーに頭を殴られて小田急線と交わすくちづけ
幽霊の正体見たり地縛霊まだこの国は終わっちゃいねえ！
天国とは大きく出たなホコ天の命すべてに垂る蜘蛛の糸
ガラス製のチェスに触った空き巣から順に感染した五月病

アイドルとサイレン

虫追篤

訊くたびに生まれ故郷を変えてくる女の顔は教祖のようで
月々の支払額はたましいがゆるす範囲で選ばぐださい
スタジオでアイドルたちがはしゃいで死者数告げるニュース速報
平和賞を創設しようよピカピカの いっとうしようにはえんぴつあげる
「午後のひとときいかがお過ごしでしょうか」と海を隔てたラジオ局から
タネも仕掛けありませんので手品師は死体の前で立ち尽くしてる
サイレンがサイレンがサイレンがまた消えていく夜 ぼくたちはまだ
だれひとりかなしいひとをのせないでハッピーエンドの終電はしる

寂しい遊園地

村田一広

睡眠が薄くて永久に明け方の光のなかを彷徨つてゐる
たづね犬のポスター見上げ賞金はないのかと失望するたづね犬
入口で待たされてゐた遊園地はひどくたいくつ寒かつたつて
途中からあなたの雨にかはつて頭から寂しさを浴びてゐる
絹糸が古かつたかな縫つてゐるそばからぷちぷちぷち切れる
風に舞ふレジ袋たちあれはきつとレジ袋の国へ向かつてる
本当に心疲れたあなたただ乗せてあげます回送列車
晴れたなら 晴れたら？ ずぶずぶに濡れそぼつ街をまるごと預かつたまま

明日は曇り25℃

森内詩紋

ササササと風に切られる雨の音 雷は、だが、ただ光のみ
窓からの景色はたちまち輪郭を無くし、ぼやける 闇ごと融ける
エアコンもきかぬ重さよ我ひとり厨に喰らう生海苔茶漬け
不意に哭く犬？犬？いいえ大丈夫あれはテレビドラマの銃声
冷や汁を濃厚なまま吸りこむ刻んだキュウリほどの自意識
これほどの強さならもう散るだろう義祖母の墓の裏の花桐
ガドルフの百合ならぬ董カーテンのかげより見やる これも、また、恋
予報では明日は曇り25℃ 会いたい、君に 理由つけずに

刻

臙

nixiのプロフィールには狂の字のきざんだ腕を赤くさらして
性といふトップ指名を掴みとる果てには崖が見えてゐたのに
誇らしく息子のことを話すとき糸がほはいつもモザイクだつた
お互ひの傷に知らないふりをする鰻のうへの薄焼きたまご
血を抜いてゐると言はれたカラオケのとなりの部屋の音が明る
い
とほくなる声の気がして八月の路上に切れたガラケーを見た
訃報つて本人からは届かない結露をしない窓など嫌ひ
あなたより歳上になる年月にあなたの狂がきざまれてゆく

渴きも出来合い

杜野詩季

取れたボタンそのままにして着るものが有るのに無いよ忙しいから
買い置きを確かめないで店に行き増殖させた豆板醤など
この日差し想定外でシャツなど洗って干して、ができないでいる
リンパちゃん黙々動く恋愛は興味がないと言わんばかりに
デリバリーできないそんな店はない、からのスーパー出来合いのピザ
話す時間もつたなくて妹へ連絡事項を画像で送る
Sサイズ卵のような青あざをいっどこで得たかわからぬ太もも
心情が沁みない言葉引きずって砂漠を歩くそんな渴きだ

黒トリュフ

和田晴美

初めましての挨拶よりも先に来る本日のお品書きという主役
育つとは遠くまで行くという事のその先が見えなくなるとしても
嘘というよりつい盛ってしまうのかわかるけど少しだけ砂を噛む
白トリュフは黒トリュフの十倍すると(削られているのは黒トリュフ)
ひらひらと黒トリュフの薄片が降る炊き込みご飯まず香りたつ
結論は食感と香りこれがかの黒トリュフかと頷きながら
ではなくて、ふたりの行く末を祈る初顔合わせ滞りなく
二人連れ三組が向かうそれぞれの帰路に名駅今日は迷わず



短めの恋と言うけど初めての恋だったので僕には永く

短命に終わる望みを諦めて人生百年時代の覚悟

短めに切れた鎖が揺れていて忘れた頃に止まるのだろう

きみという夜は短い金曜の二十八時にかける音楽

一編をのこして眠る雨の夜あとがきのない短編集を

ドラムにはなれない達磨コーギーを飼うやつみんなくたばれと歌う

梅雨闇に迷いし君は^{いずこ}何処にか短夜明^{みじかよ}けて杜若^{かきつばた}ひとつ

短髪を魅力的だと思う時批判的な人間を排除して居る

トラウマと言いたくはないつけまつ毛短すぎれば舐めたい目玉

来年の僕は笑っているでしょう今よりずっと短い髪で

賞味期限切れの食品携えて短い命を走っていつてる

あんなにも長かった夜いつの間に朝になってた君と話せて

短刀を翻して六月の花嫁だけが幸せになった

短夜を駆けていきたい、薄命の兆しが空に見えたとしても

◆ 麻数

◆ 麻倉ゆえ

◆ 雨虎俊寛

◆ アライアヤ

◆ 有村桔梗

◆ 池田竜男

◆ 十六夜／朔

◆ 石川順一

◆ 宇祖田都子

◆ 泳二

◆ 了

◆ 遠藤ミサキ

◆ おおむうけんた

◆ 歌島孟

入眠が短くなつて懐かしき夢のボロ長屋に戻れない

昔から寄り道ばかりしていたね、最短距離を選べない人

きのうより短い真昼間この夏に母の背丈を追い越すだろう

鉛筆を補助軸に挿して使いきる気持ちで起きる金曜の朝

真夜中の静けさ求め歩けどもすぐに小鳥が囀る時刻に

人修羅を1ターンで倒す動画は時間が潰せないから見ない

咳をしてもヒツコリー、と書く。短詩ってウイルスみたいに身体をめぐる

晚白柚にも似た短夜の月を背負い孤独について話した

たぶんわたしはやっていいけるしAIでたぶん短歌は書けると思う

夏の短夜に燃えゆく恋情が線香花火のように燦る

笹の葉に「帯馬券」というデカイ文字 パチンコ屋にも七夕は来る

えんぴつは短くなるほど捨てられずクッキー缶で余生を過ごす

六月は短く髪を切りました 悲恋の病ですから、以上。

猫だけがわたしにもたれかかる夜みじかい咳をしずかに逃がす

◆ 涸れ井戸

◆ 河岸景都

◆ 氷谷雪

◆ 君村類

◆ 銀嶺

◆ サラダビートル

◆ 鹿ヶ谷街庵

◆ 西鎮

◆ 雀來豆

◆ 白石 夜花

◆ 白藤あめ

◆ 豆打だんす

◆ たえなかず

◆ 千原こはぎ



食パンに挟んであれば食べられるかもしれないきみの短所も
 短針の欠けた時計を巻く腕の漂流していたのは大人たち
 鳩尾を押さえたまんま七月の夜のながさを布団に嘆く
 産声が「ショートコント!」でそれからはまあそれなりにたのしく生きる
 短パンがあればとうぜん長パンもあつてそこには一掴みの理^り
 寝静まる街の背中を撫でていく雨音さみしい嬰^{えい}ト短調
 3回半手を振りあつた永遠と花が散る度甦^{よめ}る君
 面白い映画も特に短いと思つたことはなくて 日曜
 雨だねと短く言ひて梅雨といふ季節に溶くる黒き目のひと
 はかないな夢にまで見た古本のそれも千切れた中の紐とは
 短めに終わった恋ほど思い出の隙間に居場所を見つけてしまう
 切りすぎた前髪隠すかんかん帽似合わないのがまたまた泣けて
 口あけばタイパタイパと言う部下が未だ返さぬ飲みの出欠
 わたしたちしあわせだよねそうでないことも短歌にしてしまえるし

- ◆ ともえ夕夏
- ◆ 永井駿
- ◆ 中村成志
- ◆ 西淳子
- ◆ 西村曜
- ◆ 薄荷。
- ◆ エロユキ
- ◆ 久久力ナ
- ◆ 廣珍堂
- ◆ 笛地静恵
- ◆ 福山桃歌
- ◆ 真岡まな
- ◆ まさけ
- ◆ 御糸さち

またすぐに顔を見たくて短めの物語ばかり貸し出している
 100円の缶コーヒ^{てのひら}ーを掌が包む短歌よ、あつためてくれ
 千年も生きればきつとなにもかも抱いて眠れる短いいのち
 「あつ」静寂。短い叫び。皆止まる。3秒経つて平常運転。
 眠れなさ待つことは違う短夜の熱を小指の先まで吸つて
 短きに長きが混じる雨脚にぼんやりやりすぎす梅雨休み
 短夜、と口にだすたび翔べぬまま我が胸に朽ちる黒い揚羽が
 短夜^{みじかよ}の傍らにおく歌集には旅で求めた切り絵の栞
 この人に会うのはちよつと先だからチーズケーキは棚に戻した
 野良犬の目の中へゆくもう二回ショートホープを吸ひこんでから
 あなたの名、短い歌や詩なのよね。人からもらった「生きる」のかたまり

- ◆ 深影コトハ
- ◆ 南字実
- ◆ 水也
- ◆ 宮岡りょう
- ◆ 虫武一俊
- ◆ 村田一広
- ◆ 森内詩紋
- ◆ 杜野詩季
- ◆ 茂呂直人
- ◆ 臙
- ◆ 渡邊光子





一首評

西淳子

冷凍庫にパルム絵本を二冊読み吾子が眠ってくればパルム
ともえ夕夏

パルム食いてえ！「パルム」が二回出てくることで楽しみにしている様子が伝わってきました。「パルム」と具体的に書いてあるのも良いなあ。ちよつと贅沢なご褒美のイメージがあるので内容と合っている感じがします。大人っぽいイメージもあるので「絵本」や「吾子」と対比にもなっているような……商品名の由来を調べたらイタリア語で「手のひら」を意味する「パルマ」から名付けた造語とのこと。やわらかくてあたためて好きです。

前号のまちがいさがし 答えあわせ

10個のまちがいは
見つかりましたか？
前号のまちがいさがしの答えはこちら！

短歌で
ほっとひととき
まちがいさがし 答えあわせ

カーテンかけの形
マークの形
棒の先の形
親指の有無
黒猫の表情
クッションの有無
ミニカーの色
絵本の柄
こどもの口の形
うさぎの口の形

Illustration: 千原こはぎ @kohagi_tw

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

一首評

サラダビートル

「ぐちゃぐちゃになった」と君が泣き出して突然最終回のはじまり
井倉りつ

おもしろい。当人にきつかけはあったのでしょうが、傍の人にとっては急にはじまったように見える。「うわー！ 最終回だー！」という感じ。読み手の私はそう感じた。「うわー！ 土砂崩れだー！」「みたいな。「ぐちゃぐちゃになった」は主語が気になりますが抽象的で良い。そう言うしかない心的状況だったのでしょう。ようやく絞り出せた一言というのか。ある人間が突如終わり、周囲の人が登場人物として巻き込まれる。ドラマチック。

一首評

中村成志

遠足は中止であると伝えても彼はてるてる坊主をやめない
深山睦美

連作では「てるてる坊主」係がいるという設定だが、一首では「てるてる坊主」自体を歌っていると読める。白布あるいは紙で造られ軒に吊された「彼」は、願掛けが失敗に終わった今でもその役目をやめない。というより止められない。彼はてるてる坊主として生まれ、それ以外の人生を送るように造られてはいないから。取り去られない限り、そこにぶら下がったまま。下句のひらがなの丸みが、彼の頭の形に呼応している。

一首評

西鎮

死のことを思う若さの陽だまりに何かを埋めましたか、あなたも
虫武一俊

入院（からおそらく退院まで）の景を詠んだ一連の三首目。少年期に「そこはかとない死への不安」に苛まれた経験を持つひとは少なくないのではないのか。その頃の自身を振り返りつつ、そのように繊細でいられた日々こそが実は人生の陽だまりだったのだ、と気づく大人の心象として受け止めた。誰しもが、その陽だまりの地面の下に何かを埋めまた大人、そして死に近づいてゆく。句跨りからの結句で読者に迫る作りも心地よい。

一首評

南字実

図書館の書架のあはひにわたくしといふ一冊の本を置きたし
有村桔梗

自ら（作者自身に限定せず読んだ）が、本への憧れゆえに書物となり、図書館へ置かれる願望を持つ。書架のあはひ」という表現に惹かれた。古語辞典によると、「あはひ」は（空間的に）物と物の間隔をさし、心理的な関係も意味する。この語を用いたことによって、本への親しみや図書館の空間が鮮明に浮かぶ。書架の本たちのささやきが聴こえてくる一首だ。

一首評

雀來豆

冷凍庫にパルム絵本を二冊読み吾子が眠ってくればパルム
ともえ夕夏

もう頭にはパルムのことしかない、そう読むのは簡単だが果たしてそうか。わたしの推理はこうだ。子供がなんとか眠ってくればようやく私の時間だ、それなのにパルム一本こときで満足するかよって話。じゃあ二本ならどうかってそうではなくて。この作者はパルムを喰えながら先ほど読んだ絵本の続きを読んでやろうと思っているのじゃないか。例えばキャベツくん、シリーズは全五冊だ、あと三冊ある。パルム&長新太、至福だなんて。

まちがいさがし

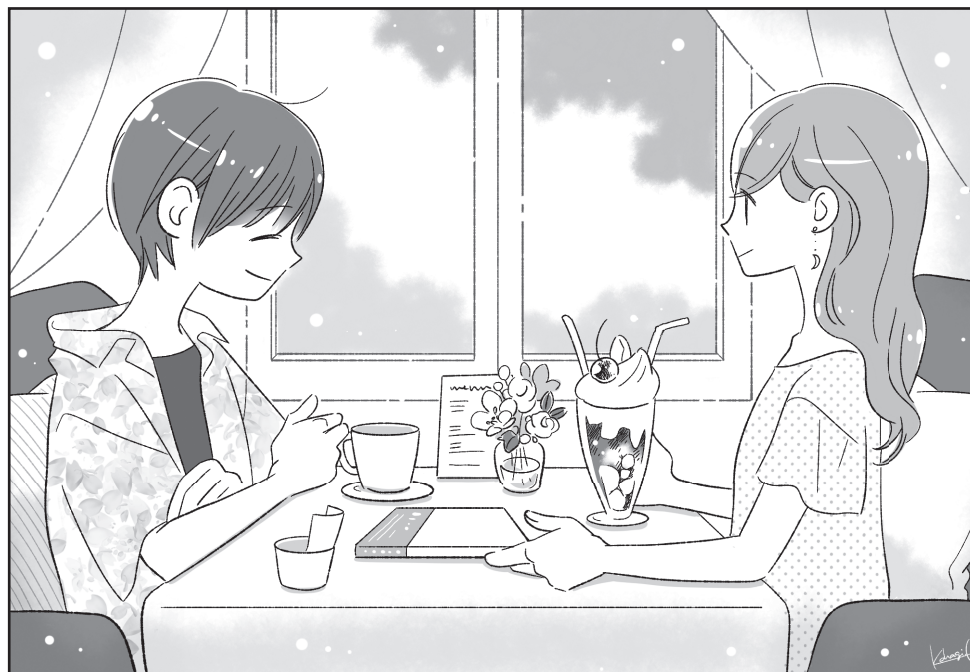
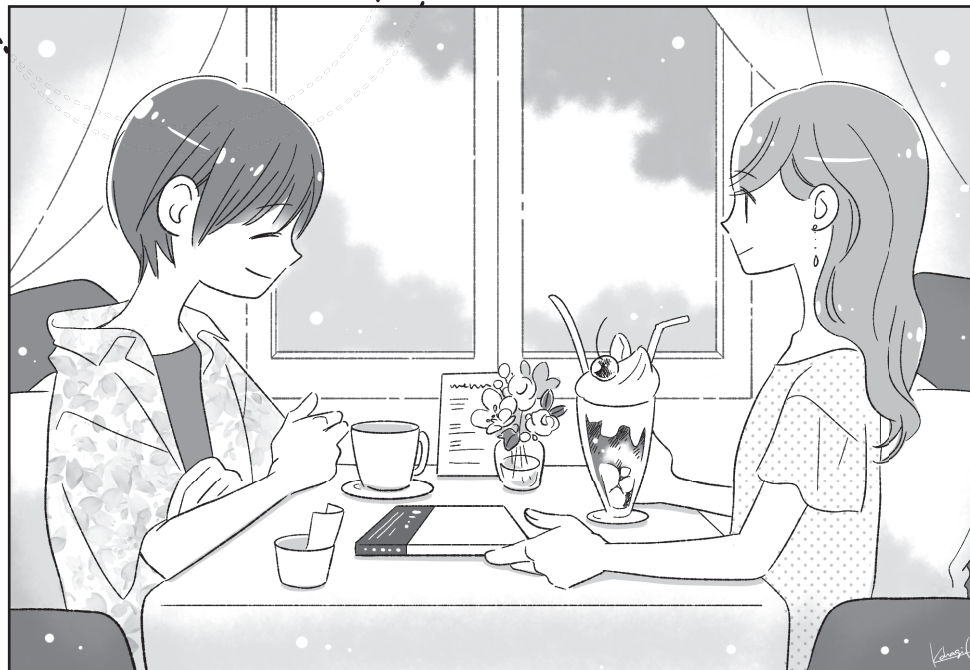


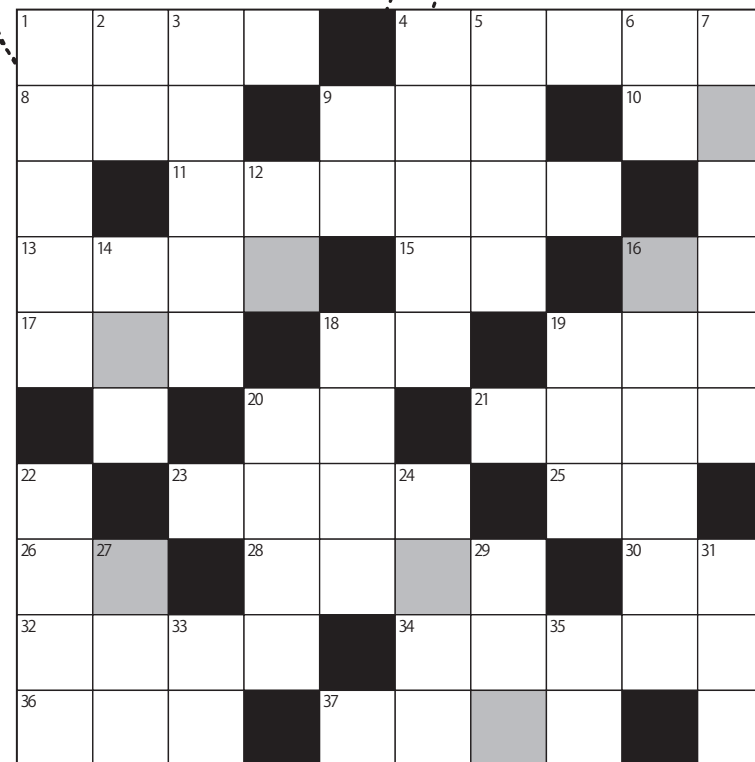
Illustration: 千原こはぎ @kohagi_tw

テーマ詠から拝借した
短歌をもとにして描いた
イラストのなかに
10個のまちがいがあります
見つけられるかな？

またすぐに顔を見たくて短めの物語ばかり貸し出している

深影コトハ

クロスワード



出題: S・F

タテのかぎ

- 須磨の関守はここから通ってきた千鳥の声に目覚めさせられました。
- ボケないように。
- 初夏の山に咲く植物。雨にぬれると花弁がガラスのように透明になる。
- 大理石などの岩石。
- 真言宗の宗祖。高野山。
- 一枚歯、二枚歯、千両、舟形、高…
- 彦根藩主。桜田門外の変で暗殺。
- 友釣りや、琵琶湖湖産が有名。
- 在原業平がモデルと言われている____物語。
- 日本式で作られた書籍。
- 深い海の底にいます。奇形の個性派が多い。
- 「君のため空白なりし手帳にも予定を入れぬ____書きで」 俵万智

- 乗馬のハンドル？
- NHKで放映中。
- これから次々やってきます。
- 東北の球団。
- 普通の順序とは逆にする表現法。____法。
- イギリスなどの長さの単位。
- 料理は素材の味を壊さないように。
- かけっ放しです。
- 工藤新一に薬を飲ませた黒づくめの男は？



色付きマスの文字を並べ替えてことばを作ってね

ヨコのかぎ

- 花言葉は「冷淡、移り気」
- ひとつくらいは持ちたいけど…
- 日本の数学。
- ____浪士。討ち入りといえは。
- 腐っても____。
- 大阪にある水族館。
- いつも庶民に…(ToT)
- 益の対語。
- 敵に____を贈る。
- 使えたらいいなあ…
- 安くなっています。
- 桐製は高級品。
- 豪華な花といえは。
- ブラタナス。街路樹に。
- 四国の巡礼地。神社。
- ____科。切ったりはしません。
- 「とても」の古語。
- ____虫。名松も無残に。
- 和歌をテーマとした野外博物館「古今伝授の里」がある県は？
- 紙やゴム製。息を吹き入れます。
- 部屋の上を見上げれば
- 夏の夜は、浴衣のお供に欠かせない。
- ____汁。野菜たっぷりの精進料理。

短歌リレーコラム 望遠鏡 15



短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手 朧

テーマ 好きは止まらない

太田宣子さんが好きだ。

少しでも近づきたくて、全く近づけていないまま旧仮名を使っている。短歌投稿サイト『うたの日』(http://utanoheyday.jp/)でも、バレバレで同じ部屋に出詠し続けていた。ごめんなさい。でもとても楽しい日々だった。今回のコラムでは、うたの日に残っている太田さんの2023年6月12日時点での1993首をもとに何故こんな惹かれてしまうのかを考えていきたい。1993首を改めて読んでみても感嘆の声が「ぐえ、ぐえ」と漏れ、コラムのために特に好きな歌を選んではいたら、577首になった。どうしようと思いついたまま、書き始めよう。

こめかみに銃口を当て引き金を引くやう「好きだ」

と告ぐる花の夜

／太田宣子
2014年4月18日『賭け』

この歌が太田さんのうたの日の最初の一首。何でもこんなに初めから格好良いのか。太田さんの恋の歌には苛烈な覚悟が見えるものが多い。

怖いほど痛いほど好き わたくしの嗚咽をあなた
賛歌のごと聞け

／太田宣子
2021年10月06日『賛歌』

遠花火わたしの奥にも戦争が立つてゐるから抱き
しめないで

／同 2021年2月24日『奥』

太田さんの歌の作中主体（以下、主体）は、覚悟を持って相手そして自分に向き合っている。そしてこれは人間相手だけではなく歴史に対してでも当てはまる。遠花火の歌にも「戦争」という言葉が出てくるが、想像力があればあるほど歴史、特につらい歴史は歌にするのが難しいように思う。誤解を招いてしまったり、誰かを嫌な気持ちにになってしまうのではないかと臆してしまう。

レタス剥くやう脱がされるわたくしの爆心地を蟬
時雨の洗ふ

／太田宣子 2021年8月6日『レタス』

うたの日の同じ部屋でこの歌を読んだときの衝撃は忘れられない。ショックが大きくて評も票も何も入れることができなかったし、頭では考えていたのに歌にすることからは逃げた自分を恥じた。太田さんの歌は遠い過去のことを歌っているのではなく、

もちろん平和の標語にもならず、主体の日々に恐怖を落とし込んでいた。もう一首、紹介したい。

思想よりかはいい服が似合ふ国 やがては終はる
パレードだつた

／太田宣子
2015年6月23日『パレード』

覚悟を持っている主体たちだが、太田さんは決してスーパーマンにはしていない。強いばかりでも弱いばかりでもない市井の人として、歌の中に生きている。

タンクレストイレの家に住む人の毎日変はる口紅の色
／太田宣子 2021年11月26日『タンク』
川それは川幅に在りわたくしはわたくしの幅に生くるほかなし
／同 2021年6月24日『幅』
でかい家でかい車にでかい犬僕らは失ふために欲しが
／同 2020年7月23日『でかい』

格差という言葉が浮かんでくる三首。特に二首目のタンクレストイレは絶妙で、タンクのない便器はタンクのあるものより少なくとも5万円以上は高くなる（TOTOのカタログ調べ）。5万円高い選択ができる家庭でなければ、口紅を毎日変えることはできないだろう。人間の欲望には果てのない虚しさがあると気づかされる三首目や、ずっと立ち上がる

タンクレストイレのように共感と想像を得やすいモチーフの使い方も、太田さんの歌の特徴だろう。

性欲のあをあをとて両の手に塩のキュウリを転がしてゐる

／太田宣子

2021年8月13日『キュウリ』
ら・ふらんすららふらんすこの瘤のあたりが巴里でけふはあひびき
／同 2020年9月2日『梨』
パンツ履く種として僕らやさしさもさびしさも白いグンゼのパンツ
／同 2020年8月2日『パンツ』

一首目は性欲とキュウリの組み合わせで、キュウリの形状や匂いがもうそうとは思えなくなってしまう引力がある。二首目はラ・フランス↓巴里↓逢引きという流れが、コミカルさを感じさせながらも艶っぽく、果実のねっとりとした食感が口に広がっていく。三首目は幼い頃に履いていた人も多いであろうグンゼのパンツ。保護者が肌触りの良いものを選んできていたものの、成長と共に自分で下着を選ぶようになり、おしゃれもしたくなって疎遠になつてしまうグンゼ。そのグンゼへのノスタルジーが巧みに表現されている。

意外な言葉に想像が膨らんでしまう歌もある。

くりかへす壘田永年私財法 点滴の今日のリズム
としたり

／太田宣子 2021年6月8日『永』

題が『永』でも壘田永年私財法を使う人は少ないだろう。主体が家族が点滴を受けている場面で、落ちるリズムに壘田永年私財法を合わせている。何度も点滴を受けるような状況の暗さと唐突な壘田永年私財法のすこーんと抜けている感じが相まって、泣きたくなるような一首になっている。

あひたくてあへば疲るるひとあて夜にはあかく
ひらく睡蓮

／太田宣子 2020年3月13日『疲』

露草を漬し昏さの残りゐる指紋 無罪は無実と違ふ

／同 2019年9月6日『実』

曼珠沙華おまへも自分がきらひだらう その赤は
火でも血でもないのだ

／同 2014年9月22日『自分』

太田さんの歌には植物が多く登場するが、この三首もそれぞれの植物の特徴やイメージを活かして鮮烈な印象に仕上げている。一首目は睡蓮の花言葉のひとつである滅亡を浮かべると、ぞっとするほど官能的だ。二首目は露草のアントシアニンによって染められる指紋に、露草の花びらを潰すという行為を超えて無罪と無実の違いとは何かを読み手に投げかけている。そして三首目。恐ろしいイメージを持たれがちな曼珠沙華、彼岸花に自分への感情を重ね、火でも血でもないただの赤であることの意味への切望を感じる。

次に、家族をテーマにした歌を三首取り上げたい。

湯豆腐をひとりに食うたといふ母の眼鏡のくもり
を思ふ寒暄

／太田宣子 2020年11月27日『寒』

死にゆける父のひたひを撫ぜ母の可愛いとぼそり
どこまでも花野

／同 2019年8月19日『可愛い』

この膝にかほを埋めて泣く母を掻き集めても掻き
集めても

／同 2019年3月24日『埋』

何も説明は要らないくらい迫力、悲しさや寂しさ、愛しさが伝わってくる。私的なことになるが、

この歌たちとほぼ同時期に私は父の病氣と介護、死別を経験した。太田さんの家族をテーマにした歌が本当に胸に響いて、繰り返し読んで支えにしていたことを今も覚えている。

しみりしてしまつたので、少し可笑しい話を。

にんにくをガーリックといふ夫とあてオリブオイルのきんいろの日

／太田宣子

2020年4月4日『ガーリック』
にんにくをガーリックつて呼ぶひとにただのセフレ
と思われている

／朧 2020年4月4日『ガーリック』

太田さんの背中が大きく、はるか遠くにあることを実感した出来事だった。でも二つの歌がリンクしているようで、とてもうれしかった。

さて「何故こんな惹かれてしまうのかを考えていきたい」と最初に述べたが、ここまで書いてきてもよくわからない。太田さんの歌たちに感情を揺さぶられ、なぐさめられ、励まされる。それだけだ。それでいいのではないだろうか。これからずっと。もちろん大きな背中も追いかけていきたい、一生届かなくても。

また必ずどこかで一緒にしたいです。

鳥が鳥のこゑできみがきみのこゑで 歌へる世界
でありますやうに

／太田宣子

2018年8月10日『自由詠』

ご感想は
こちらまで!

Twitter
ハッシュタグ
#うたそら

「うたそら」では Twitter での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

連作欄 8 首の連作 自由詠
テーマ詠欄 「月」
一首評 「そらよみ」
短歌リレーコラム 「望遠鏡」
リレーエッセイ 「いちごいちえ」

短歌募集

第16号 23 8/31(木) 24時
• 8 首の連作 自由詠 • テーマ詠 「月」 1 首

第17号 23 10/31(火) 24時
• 8 首の連作 自由詠 • テーマ詠 「茶」 1 首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

あつという間にすっかり梅雨に突入した今日このごろ、皆さまいかがお過ごしでしょうか。今回のうたそらは、組んでみたところ 2 ページ足りないということが判明し、急遽、3 回目となるまちがいがしと、初の試みであるクロスワードのページを制作しました。クロスワードは「今日中に作って!」という無茶振りに応えて実父が数時間で制作してくれました。父よ、ほんとうにありがとうございます。どうかお楽しみいただけますように……! 次号は 9 月発行です。テーマ詠のお題は「月」。たくさんすてきな作品を、お待ちしております!

編集鳥 千原こはぎ

今号のうたそら

第15号

参加歌人様 69 名
連作欄 50 名
テーマ詠欄 53 名
一首評 6 名

ご寄稿いただきありがとうございました!

コラム 朧 さん
エッセイ カラスノ さん



illustration: kohagi chihara

圧死するマリオでずっとわらいたい 時間のことはわすれてもいい

カラスノ



15

リレーエッセイ

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ 未完
書き手 カラスノ

つい最近気づいたことだが、私は何かを完了することが苦手だ。「面白い小説を読み終えてしまふのが惜しい」というような感情はよく聞くように思うが、もっと原初的な反応として、何かを完了することが難しい。無理やりにそれを行おうとするときには凄まじい気力が要求されるようなのだ。

これに気づいたのは、先日、出張の航空券の予約をするときのことだった。行き先は決まっております、乗り換え検索によって乗るべき便も決めた。航空会社のサイトにログインして、該当便を検索、空席をクリック。「次へ」ボタンをよ

どみなく押し、搭乗者情報の入力も手際よく終え、手荷物の注意事項もチェックして、そのあと、最後の「予約を確定する」ボタンが、どうしても押せない。あー、もしキャンセルしたらどうなるんだっけ、と取消し手数料の規定ページを見たりする。また、戻る。予約を確定し、早く座席指定に進まなければいけない。が、最後のボタンは押せない。

結局、そのページはいったん寝かせて、別の仕事に没頭する。奮起して「確定」ボタンを押したのは、退勤間際のことだった(当然タイムアウトしており、最初からやり直すことになった)。

なぜ最後のボタンがすぐに押せないのだろう。うんざりしながら、あ、私これよくやっているな、と気づく。ZOZOTOWN のカートには無数の商品が入ればなしだし、靴のヒラキのサイトでは 0.5cm 刻みの上靴が大量に未購入となつてい

る。一番反省しているのは、「〇日あいてたら飲みに行こう」系の約束を保留してしまうこと。〇日が遠い未来であればあるほど、そんな先の自分の行動と考える確定することが怖い、とい

う気持ちになる。一方で、自分の外部の世界に對しては、さっさと確定していることを強く望んでしまう。「この商品が 8 月までに再入荷するかどうかはわかりません」、では困るのだ。自分とはなんとも勝手な人間だ。

ちなみに、こんな私がストレスなく買い物できる唯一のサイトが、「コープデリ(生協)」である。次回お届け分の注文が適切になると、自動的にカート内の商品の注文が確定される仕組みになっている。〆切までにやるべきことは「カートに欲しいものを放り込んでおくこと」だけ、つまり主體的に「注文確定」ボタンを押す必要がない。流れくる時間というものが、勝手に確定ボタンを押してくれるのだ。なんてすばらしいシステム! まるで強制スクロール面で圧死するマリオのようである。

そんなわけで、私は一週間前に書き始めたはずのこのエッセイを終えることができず、〆切直前にやむをえず送信している。未来の自分の可能性を狭めたくなかった、などとありふれた言い訳を並べながら……。



うたそら 第15号

発行：2023.07.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>